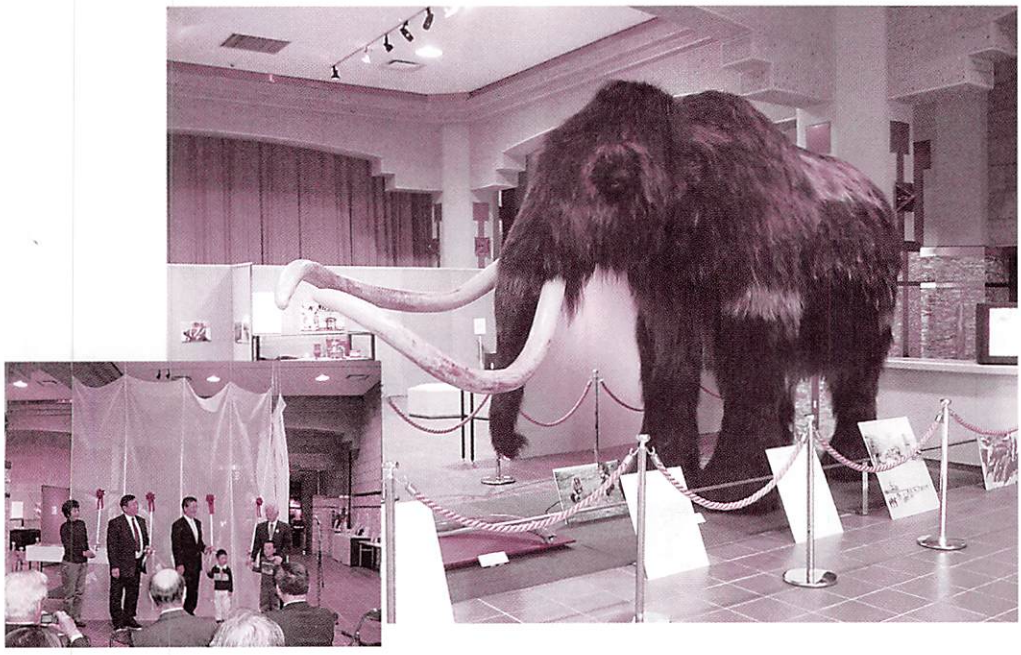
ISSN 0917－4729

北方民族博物館だより

No.67



復元マンモス模型
サハ（ヤクート）　2007年制作
体長5.25m　体高3m

発見場所の川の名前にちなんで命名された「チレフチャフ・マンモス」の全身の骨は1971年にシベリア東部で発掘されました。約３万年前のものとされています。2005年秋に、当館とロシア連邦サハ共和国の国立ヤクーツク北方民族歴史・文化博物館との間で締結した学術協力協定をベースに、このたびチレフチャフ・マンモスの復元を実施しました。発掘成果に基づいたこの模型は、ロシア国内で高く評価されています。11月９日には、同博物館長シシーギン氏（写真左から二人目）も参加し、マンモスコーナーのオープニングセレモニーを挙行しました。平成22年３月末まで展示予定です。（関連記事本紙５頁）

1　表紙　復元マンモス模型
2　第22回北方民族文化シンポジウム
5　ロビー展「サハ共和国の自然と文化」
6　「アイヌのかご細工・テンキをつくろう」／「アイヌの食材・ヤブマメでごはんをつくろう」
7　北海道博物館紀行「標津サーモン科学館」／講習会「モンゴル・クッキング！」
8　INFORMATION

北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

第22回北方民族文化シンポジウム
『北方地域の先住民文化と博物館』

2007.11.4 - 11.5, 12.1
会場　オホーツク・文化交流センター

昨年に引き続き、「博物館と民族文化」をテーマにシンポジウムを開催しました。キーワードを「資料を活かす」とし、博物館が民族文化の保存や伝承、普及・啓発にいかに寄与できるか考えることを目指しました。国内外の博物館関係者、民族文化伝承者、教員、研究者等により、実践的な取り組みについてご発表いただきましたので、以下に概略を紹介します。

● 第１部＜資料を活かす伝承・普及活動＞

座長：中島　一之氏（上湧別町ふるさと館ＪＲＹ学芸員）

出利葉　浩司氏（北海道開拓記念館学芸員）
「民族資料を体験学習に活かす」

当館の『体験学習室』における近年のアイヌ文化関連プログラムは、「ゴザ編み」、「シカ笛作り」、「罠（ワナ）の仕組み」、「タラ（荷負い縄）で運ぶ」、「伝統衣装を着る」などのなかから５つ前後の体験要素で構成している。道具を実際に動かす・使う・作ることで、身近なものとしてとらえ、理解してもらうことができ、解説員によるレクチャーは誤解や偏見を防ぐ意図がある。

しかし、「伝統的」な生活用具が中心となるため、「現在」をどう伝えるかが課題となる。さらに、触れることで何を学ぶのかが重要であり、「質感」「仕組み」など目的に応じて、本物でなくてはならないのか、別の素材や模型が利用できないか検討すべきである。また、本物を使用する際には、資料を傷めないためにどう扱うか、貴重さについても学んでもらう機会を提供することができる。

萱野　志朗氏
（萱野茂二風谷アイヌ民族資料館館長）
「萱野茂の功績と資料館の役割」

昨年他界した父・萱野茂は、平取町二風谷でアイヌとして生まれ、アイヌ語の伝承およびアイヌ文化の継承と保存に人生を捧げた。いくつもの功績のなかでも、自ら収集した民具をもとに私有地も提供して資料館を開設したことは重要だ。資料は後に平取町立二風谷アイヌ文化博物館に移管され、古い資料館は個人所有のアイヌ民具を中心に世界の先住民族の資料を展示し、私立で運営されている。民具の写真と計測図に萱野茂が解説を書いた『アイヌの民具』は、製作者や研究者にとって重宝な文献である。また、両館のアイヌ生活用具1121点は、2002年に国の重要有形民俗文化財に指定された。

アイヌ語に関しても、萱野茂はアイヌ語教室の先駆者であり、辞典も出版した。これらの功績を活かし、資料館では見学とともに講話によって誤った情報や偏見をなくす取組みをしている。『金成マツノート』の翻訳出版事業も継続し、遺産を還元しなければならないと考える。

また、発表者はＦＭピパウシというラジオ放送をとおして、アイヌ語や現在のアイヌのことを伝える活動も続けている。

● 第２部＜生きた展示＞

座長：本多　俊和（スチュアート　ヘンリ）氏
（放送大学教授）

アンドレア・ラフォレ氏
（カナダ国立文明博物館民族学・文化研究部長）
「『私たちは生きている！』カナダ国立文明博物館
先住民ホールの制作における協議と共同」

当館は1992年に「博物館展示において先住民の過去を解釈する際に、先住民自身のより多くの参加を求める」という国の特別委員会の勧告を受諾した。同年、先住民ホールの企画に着手し、関連分野の学芸員と全国各地の専門知識を持つ12人の先住民による委員会を発足させた。初年は作業を進めるための方針づくりに充てられ、同時に展示の4つの主要テーマ「私たちは今もここに生きている」「私たちは多様である」「私たちは古代から土地との結びつきを有する」「私たちは貢献する」を決めた。

その後12年をかけて、2003年にホールはオープンした。予算や期限の制約のなか、博物館当局との間には委員会の決定事項の権威（オーソリティ）、効率、権限（パワー）など難しい課題もみえた。ホールがオープンして終わりではなく、その後も学芸員と先住民の共同によるプロジェクトは続けられており、生き生きした最新の展示を維持し、更新する挑戦は現在も行なわれている。

文　公輝氏（大阪人権博物館学芸員）
「大阪人権博物館の総合展示とアイヌ民族」

2005年にリニューアルした常設展示では、「私が向き合う日本社会の差別と人権」を統一テーマに、他人事でなく自身のこととして考えてもらうよう意図した。「アイヌ民族」展示コーナーの制作にあたっては、性別・居住地の異なるアイヌの若い世代を中心としたメンバーと学芸員がともに展示の構成、手法、資料選定などを行なった。

最初に1960～70年代以降のアイヌの主張と活動に絞るという提案をしたが、議論の末、祖父母世代の記憶や経験を強調すべき、自分たちにとっても貴重な資料だ、等の意見により、伝統的家屋「チセ」を再現することとなり、差別と人権に関わる歴史の経緯も展示することになった。アイヌにとって意義ある展示にできたと思う。また、資料には当事者・原所蔵者等による解説を添えており、感情に深く関わる課題には有効な手法と考えている。

事例報告：角　達之助（当館学芸員）
「『サハ共和国の自然と文化』展について」
開催中のロビー展は、2005年にサハ共和国の博物館と協定を結んだことを記念して、サハの自然や人びとの生活を紹介するために企画した。関係者等から提供された資料や写真、発表者が現地を訪れた際に撮った映像などとともに、当館の所蔵する民族資料を展示した。資料や情報の収集を継続し、いずれ特別展へとつなげてゆければと考えている。（関連記事は本紙５頁）

● 第３部＜資料がつなぐ関係機関･教育とのネットワーク＞

座長：出利葉　浩司氏（北海道開拓記念館学芸員）

パトリシア・パートナウ氏
（アラスカ先住民文化センター文化・教育サービス副館長）
「コミュニティとの架け橋
－博物館プログラムにおけるアラスカ先住民との連携－」
先住民と連携して行なっている多くのプログラムのうち、２つに絞って述べる。
火曜から土曜の放課後に行なっている高校生向けプログラムは、「芸術」「メディア」「踊り」「リーダーシップ」「先住民青年オリンピック」の５つから成り、１日平均50人が受講している。このプログラムを通じてスタッフと長期の関係を築き、技術だけでなく文化についてさまざまなことを学び、先住民であることの誇りをもつようになる。学校の単位としても認められ、優秀な生徒はアルバイトとして雇用されることもある。
先住民と関わりの深い企業や公的機関等の非先住民の職員・関係者向けの啓発的ワークショップも行なっている。「認識」「理解」「係わり」「行動」の４つのステップで、自他の文化に気づき、互いのコミュニケーションの方法を学び、よりよい社会をつくるパートナーとしての関係を築くことを目指すものである。これらは成果を上げ、コミュニティとの架け橋として機能している。

佐々木　博司氏
（千歳市立緑小学校教諭）
「学社共同による学習教材・カリキュラム等の開発と活用」
「アイヌ文化の素晴らしさ」をではなく、「アイヌ文化を通して学ぶ」ことに取り組んでいる。サケ漁から命について考える授業を行ったりもしている。
発表者が千歳市立末広小学校で教育課程として集成したアイヌ文化の体験的学習活動は、10年を経てもほぼ同水準で継続されている。空き教室にまるごと復元したアイヌの伝統的家屋「チセ」も維持されており、学習の柱となっている。これは学校のみでできることではなく、地域の理解と協力からもたらされたものである。
転勤を契機に、どの地域の学校でもできる教材の確保をと考え、現在の勤務先の小学校に学習課程とリンクした資料を必要な期間だけ借用する「活用型資料室」を今年設置した。その有効性を検証しているところである。

山崎　幸治氏
（北海道大学アイヌ・先住民研究センター助教）
「博物館と先住民研究：
アイヌ・先住民研究センターが模索する可能性」
今年４月に設置された当センターは、「アイヌ」を冠する初めての国立の教育研究機関である。アイヌを中心に世界の先住民族を研究するが、大きく３つの特徴がある。一つ目は「学際性」であり、特に法律学の分野に力を入れている。次に「教育の重視」であり、授業のほかに、一般向けの講演会、ワークショップ、シンポジウムも開催する。さらに、「アイヌ民族との協同」を打ち出し、運営委員会にもアイヌの委員がおり、研究員制度も整備中である。
現在進めているプロジェクトのテーマには、「権利戦略」「アイヌ史再構築」「社会調査」「先住民エコツーリズム」「アイヌ語データベース」「教育・教材」がある。また、新たに「現代的ニーズと物質文化研究」「パイロット・ミュージアム」「アイヌ・アート」「知的財産権」に関するプロジェクトも構想中である。

● 第４部＜映像・音声等記録資料の活用＞

座長：渡部　裕（北方民族博物館学芸主幹）

田口　洋美氏（山形芸術工科大学教授）
「絵はがき・古写真、ビジュアル資料の
映像民族学的利用と展開
－東北芸術工科大学東北文化研究センターの試み－」
平成18年度までの５年間、文科省の助成で進めてきたプロジェクトの一部として、ビジュアル資料の収集とそのデジタルアーカイブス化を行った。本年度からは「東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究」というテーマで、収集と公開に加えて、高度な活用という応用段階に進めてゆく。
研究に利用するだけではなく、地域の人びとが活用可能なアーカイブスのあり方と手法の開発を目指している。例えば、学生５,６人を主体とした「あるく・みる・きく」というチームで、一般家庭に保存されているアルバムを素

材に聞き取りを行い、資料性のある写真をスキャニングしてセンターに持ち帰るということを始めている。学生教育の一環であるが、若者が地域を発見する契機ともなる。また、卒業後も住んでくれることを願っている。一方、収集された絵はがきや古写真に写されたものとその背景については、地域住民の記憶を引き出して具体的な状況を把握することをはじめ、歴史的記述の検証、物質文化の研究などにも応用できる。さらに、インターネット上での公開だけではなく、上映会や研究会の各地での開催や、雑誌等の印刷媒体の併用が、地域になじむ手法であると考える。

内田　順子氏（国立歴史民俗博物館准教授）
貝澤　耕一氏（平取町アイヌ文化保存会事務局長）
「〈マンロー関係資料デジタル化プロジェクト〉
－記録を活かすために－」

スコットランド出身の医師N.G.マンロー（1863～1942）は、晩年のおよそ10年間、平取町二風谷に住み、アイヌ文化研究を行った。地域住民を無料で治療していたことから、人びとに大変慕われていた。マンローが収集した資料は、日本やイギリスの博物館や大学等に所蔵されており、器物類は既に全体像が把握されているが、写真、映画、手紙等文書類については部分的な調査に留まっていた。そのため、平成17年度から日英の主な機関が共同して、これらの資料をデジタル化して統合し、研究に活用しやすい状態にすることを目的とするプロジェクトがスタートした。

なかでも昭和初期に撮影された熊送り儀礼の映画フィルムは、先行する各種の取り組みと、二風谷住民の協力による調査研究の結果、ビデオ作品「Ainu Past and Present －マンローのフィルムから見えてくるもの－」にまとめることができた。今後も資料の整理と検証を続け、その成果は、所蔵機関にとっても、研究や伝承活動に活用しようとする人にも、実りある適切な形で公開したい。（内田）

マンローの撮った映像には、儀式の準備のような地道な作業の部分が抜けていたり、入れ墨や盛装といった演出が加えられるなど、注意しなければならないことがある。一方で、見物客の服装や背景など、意図していない部分から当時の二風谷の様子を見ることもできる。被写体となった人の遺族の承諾を得ながら、地域の人のためになる研究として、このような重要な記録の活用を考えねばならない。博物館に対しては、過去だけではなく、今どうであるかという歴史的流れを知らせることを要望する。（貝澤）

● 各部での質問・コメント等

各発表の後の質疑応答では、具体的な質問も多く、関連する他の事例の紹介や、今後に向けての提言などもありました。全体として発表者・参加者から関心が高かったテーマは、本物の資料の持つ意味やその利用の効果、資料について誰がどう伝える（解説する）のが有効か、映像利用に関する課題とその解決法、現代の先住民族についてどう伝えるか、といったことでした。すべてに答えや方針を打ち出せるものではありませんが、ヒントになる事例は多く、検討すべき課題は見えたという印象でした。

● 12月１日（土）午後１時30分～３時30分

記録映画「プージェー」上映会
共催：オホーツク・文化交流センター

日程的にはひと月遅れになってしまいましたが、シンポジウムの関連事業として、上映会を開催しました。この映画は、探検家の関野吉晴氏が「グレートジャーニー」の途中で出会ったモンゴルの少女プージェーとその家族との交流をとおして、変わりゆく遊牧民の生活を描いたドキュメンタリーです。６歳のプージェーは、家畜の世話をはじめ、薪運びや食事の支度など一家の重要な働き手です。プージェーの魅力と、家畜とともに生きる人びとの知恵やたくましさが存分に織り込まれる一方、市場経済の導入により悪化する環境や増える家畜泥棒、保険がないために受けられない医療、交通事故…など、厳しい現実も映し出されています。

上映前の山田和也監督のお話

当日は、監督の山田和也氏が来網し、撮影時の状況などについてお話しくださり、「お金ではない価値観や、人との出会いの意味など、いろいろなものが見えてくれると嬉しい」とのメッセージをくださいました。400名近い市民が鑑賞し、「命」や「今の日本」について考えさせられた等のご感想をいただきました。

（学芸グループ　齋藤玲子）

ロビー展

『サハ共和国の自然と文化』

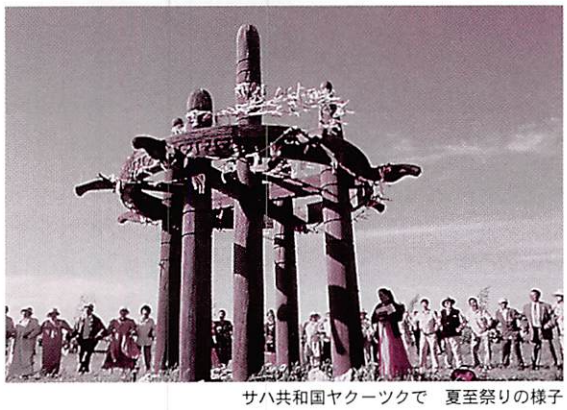
2007.10.19 - 12.16

2005年、当館とサハ共和国の国立ヤクーツク北方民族歴史・文化博物館は、学術交流を促進するための協定を締結しました。本ロビー展は、この協定を記念してサハ共和国の自然や文化について紹介するものです。

サハ共和国は、ロシア連邦内最大の面積（約310万km²）を有する共和国です。冬期にはマイナス50℃まで気温が下がる世界で最も寒い地域に属します。最北端の北極海沿岸地域はコケ類や灌木（かんぼく）に覆われたツンドラ帯にあたり、内陸に向かうに従って徐々に針葉樹林が広がるタイガ帯に、さらに南にはステップ帯が広がっています。国土の大部分は永久凍土に覆われており、凍土内には石油、天然ガス、ダイヤモンド等の資源、マンモス等の古生物の骨が大量にあり、現在世界中から注目されています。

国名の「サハ」とは、「ヤクート」とよばれていた人びとの自称です。現在ではサハとロシア人が人口の大多数を占めていますが、もともとは現在少数派のエベンキ、エベン、ユカギールやチュクチといった北方諸民族が飼育や狩猟を中心とした生活を送っていた地域です。後続のサハは南方より遊牧文化を携えて移住してきたといわれ、ロシア人は17世紀頃に、毛皮獣の獲得を求めて進出してきました。

ロビー展は、当館所蔵の実物資料のほか、国立ヤクーツク北方民族歴史・文化博物館提供の写真、サハ共和国で事業を展開している株式会社サハ・ダイヤモンド（本社：東京）提供の模造ダイヤモンドや写真によって構成しました。



サハ共和国ヤクーツクで　夏至祭りの様子

展示の様子

マンモスコーナー

当館では、国立ヤクーツク北方民族歴史・文化博物館にシベリアマンモスの実物大のレプリカ製作を依頼していました。約１年間の製作期間を経て、ついに当館で展示されることとなり、ロビー内にマンモスコーナーを設置しました。（表紙写真）

このマンモス模型は1971年にサハ共和国で発掘された約３万年前のマンモスの全身の骨を元に原寸大（身長5.25m／体高 3m／体幅 2.6m）で復元したもので、発見場所の川の名にちなんで「チレフチャフ・マンモス（Tirekhtyakh Mammoth）」と名付けられています。マンモスの毛は、サハのウマ400頭分の毛を使って表現しました。ウマの毛は、発掘されたマンモスの毛に最も似ているとされており、生きていた頃の面影をリアルに表現するために用いました。

現在、サハ共和国では経済的、学術的理由からマンモスの発掘が盛んに行われています。

マンモスの遺体は、永久凍土内に閉じこめられており、凍土が溶けて体の一部が地上に出てこない限り、なかなか見つけることはできません。にもかかわらずマンモスの発見・発掘率が高くなったのは、地球の温暖化による凍土の縮小が原因とも言われています。

当館では今後もサハ共和国に注目し、北方民族文化の調査はもちろん、マンモスを通じて地球温暖化の情報も収集し、マンモスコーナーの充実を図っていきたいと思っています。

（学芸グループ　角達之助）

『アイヌのかご細工・テンキをつくろう』

2007.7.16、9.15-16、9.29-30

テンキは千島アイヌのかご細工で、江戸時代の文献にも記録され、博物館等に実物が残されていますが、その製作法は伝えられていませんでした。テンキ編みを復元してきた知里眞希氏を講師に、昨年、ラフィア（ヤシ）を材料に基本的なコイリング技法でコースターを製作する講習会を開催しましたが、今回は伝統的な素材であるテンキグサ（イネ科／別名：ハマニンニク）の葉での製作に取り組みました。

まず、７月に刈り取りをし、葉を選り分けて乾燥させ、材料を確保しました。幾重にも巻かれた葉の芯の部分のみを使うため、手間と時間のかかる作業でした。

９月には最初の２日で、底部の編み始めから胴部の立ち上げ方までを学び、次回までに各自が編み進めました。２週間後に、編み終わりの処理を学び、蓋と胴部を合わせました。

綴じ針を使って細く割いた葉を編む作業は、なかなかはかどらず、講習会終了時までに完成させることができた参加者は多くありませんでした。また、予定していたより小さな物しか作れない方もいました。

しかし、素材の扱いにくさや手間暇と根気のいることを実感し、改めて伝統的なアイヌの手仕事への理解は深まったようです。材料を採ることから始め、実用品を作り上げた満足感は大きく、同様のかご編みをしてみたいとの声もありました。材料や時間の確保、参加者の目的意識の差異など難しい課題もみえ、博物館の講習会としてどこまで行うのが適切なのか、考えさせられる事業でもありました。

（学芸グループ　齋藤玲子）

※㈶アイヌ文化振興・研究推進機構の「アイヌ文化活動アドバイザー派遣事業」により講師を派遣していただきました。

講師：知里眞希氏（中央）

学芸員講座④

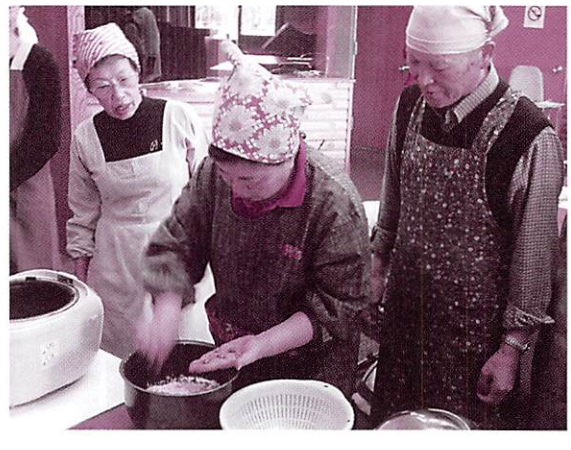
『アイヌの食材・ヤブマメでごはんをつくろう』

2007.11.10

身近にありながら、あまり知られていない食材・ヤブマメ。地上と地下の両方に実をつける豆です。実際に掘って、試食する体験講座を行いました。

ヤブマメはマメ科のつる性１年草で、道端、やぶ、林縁部など日当たりの良い場所に生育する身近な植物です。開花する花と、花弁のない閉鎖花の二つがあり、食用となる地中果は閉鎖花に由来するものです。地中果は地面から数センチのところに実り、地上果の５～７倍の大きさがあります。アイヌの人びとは伝統的に食材として利用し、味も栄養も栽培種の豆に劣らないものですが、他の山菜と比べると一般には認知度が低いと思います。

講座では、まず野外で枯れたつるを目印に地面を掘り、実がなっている様子を見て、少量を採集しました。豆は、土と莢（さや）を落として洗い、米・もちきびと混ぜて塩を加えて炊飯器で炊きました。その間、鮭を使った三平汁風の「チェプ・オハウ（魚の汁物）」を作り、一緒に試食しました。



参加者は、20～70歳代の男女10名でしたが、全員がヤブマメを食べるのは初めてとのことでした。採集のときも、道ばたのヨモギなどに混じって生えるごく普通の草であることや、地中から薄紫色の丸い豆が出てくることに驚いていました。掘って豆を見つけるのは、童心に返って楽しかったとの感想も多く寄せられました。豆の味もよく、他の料理も作ってみたいとの声も聞かれました。アイヌの人びとの植物に関する豊かな知識と、食文化の一端に触れていただけたものと思います。

（学芸グループ　齋藤玲子）

北海道博物館紀行

『標津サーモン科学館』

2007.10.13

講師：市村政樹氏（右）

「北海道博物館紀行」は、道内各地にあるさまざまな博物館の活動を紹介する催しです。今回は、根室管内標津町にある標津サーモン科学館を取り上げ、講師として学芸員の市村政樹さんにお越しいただきました。

前半に、スライドやイラスト、アニメーションを使った講演がありました。標津サーモン科学館の施設や活動内容、近くを流れる標津川の様子などを紹介され、続いてサケの種類や生態、人とサケとの関わりなどについての説明がありました。私たち日本人にとっては普段から接する機会が多いサケですが、世界にはサケの仲間が主要なものだけで十数種類もいること、本来の分布は北半球に限られていたのが近年は南半球にも移植されていること、現在は天然物よりも養殖による生産量の方が多いことなど、一般にはあまり知られていないさまざまな話題が紹介されました。また、サケが生まれた川に戻ってくること、秋に産卵すること、産卵後に死んでしまうことなど、私たちがサケに対して抱いている知識が、サケの種類が違うと必ずしも当てはまらないことなども参加者の関心を惹きつけていました。

後半は、講師が実際にサケを解剖し、参加者はその様子を見学しながら体のしくみについての説明を受けました。サケの目や鼻といった感覚器官の構造と働き、鰓や心臓、腸、卵巣や精巣などの位置や役割について、実物を前にした解説には迫力があり、参加者は食べ物としてではなく、生き物としてのサケに新鮮な驚きを感じているようでした。

（学芸グループ　中田篤）

講習会

『モンゴル・クッキング！ 青年海外協力隊体験談＆実習』

2007.11.17

JICA（国際協力機構）国際協力推進員の高橋久美子氏を講師に迎え、モンゴルに住む人びとの生活や食文化を学ぶ講習会をおこないました。

講習会の前半は、講師が勤務するJICAの活動や役割、そして青年海外協力隊員としてモンゴルに赴任していたご自身の体験を、スライドを交えながら紹介いただきました。講師は、ロシアとの国境に近いスフバートルという町の小学校で子どもたちに絵を教えていました。モンゴルと言えば、ゲルで暮らす遊牧民というイメージを持たれることが多いですが、町での生活は日本と大きな違いはないようです。しかし、小学校では一部の優秀な子どもの能力を伸ばすことに力が注がれていたり、絵の授業ではお手本とまったく同じ構図や色使いのものが評価されるなど、教育の場面ではさまざまな違いがあったとのことでした。

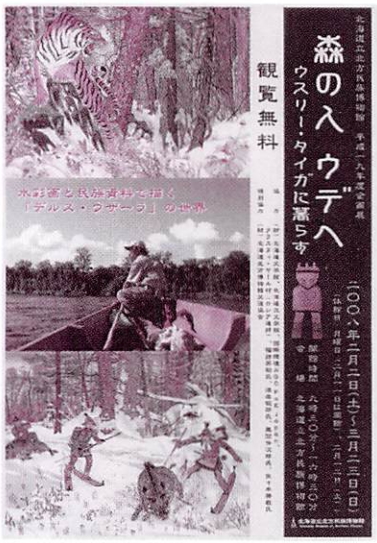
講師：高橋久美子氏（左）

後半は、モンゴルの家庭料理「ボーズ」作りの実習をおこないました。ボーズとは、モンゴルの旧正月の頃によく食べられる蒸餃子のような料理です。講師と参加者が一緒に実際の調理を体験しました。まず小麦粉にお湯を加えて練り、適当な大きさに分けて丸め、麺棒で円く伸ばしてボーズの皮を作りました。そしてその皮で、ひき肉と刻んだ玉ねぎを混ぜ合わせた具を包み、蒸し器で蒸し上げます。

なかなか皮が円くならなかったり、きれいに包めなかったりと苦戦する方もいらっしゃいましたが、最後にはみんなでボーズを試食し、モンゴルの味を楽しみました。

（学芸グループ　中田篤）

平成19年度企画展
森の人　ウデヘ　－ ウスリー・タイガに暮らす －



会期　平成20年２月２日［土］－３月23日［日］
会場　当館特別展示室
観覧　無料
特別協力　財団法人北海道北方博物館交流協会

ロシアの沿海地方には、今もトラやヒョウが生息する、広大な原生林「ウスリー・タイガ」が残されています。先住民族ウデヘの人びとは、この森でシカやイノシシを、川ではサケを捕りながら暮らしてきました。

ロシア人将校アルセーニエフは、今から百年ほど前に沿海地方を探検し、「デルス・ウザーラ」を記しました。これを画家G.D.パブリーシンが絵本によみがえらせました。今回の企画展ではこの絵本の原画（水彩画）と、当館所蔵のウデヘの民族資料により、ウデヘの伝統的な狩猟文化を紹介します。

【関連事業】
◆講演会「ロシア・沿海地方の森と人びと」　２月２日［土］午後１時30分から
　講師　津曲敏郎氏（北海道大学大学院教授）、野口栄一郎氏（FoE Japan）、A.カンチュガ氏（ウデヘ文化伝承者）
◆講演会「沿海地方の森と動物たち」３月16日［日］午後１時30分から　講師　あべ弘士氏（絵本作家）

INFORMATION

行事報告

◆11月３日［土］に、芸術文化週間関連事業として、「北方民族博物館シアター」を開催しました。

映像の上映や、紙芝居、絵本の読み聞かせなどを行いました。

◆11月23日［金］に、あばしりまなび塾フェスティバルで「革でつくるストラップづくり」を開催し、のべ150名の参加がありました。

◆12月20日［木］に、年末恒例の「ロビーコンサート2007　青少年のための室内楽の夕べ」（主催：財団法人山田記念青少年育成財団、財団法人北方文化振興協会）を開催しました。札幌交響楽団員による弦楽四重奏をお楽しみいただきました。

「オホーツクブルー展」

１月10日［木］～１月17日［木］

オホーツクの素晴らしさをたくさんの人達に知ってもらいたいという、オホーツク地域のエリア・アイデンティティーの取り組みの一環として、このたび「オホーツクブルー」と「ロゴマーク」が選定されました。これを機に、さらにオホーツク地域を広く紹介するために、「オホーツクブルー展」を、網走支庁との共催で開催します。

感謝状、受賞

◆サハ共和国E.I.ミハイロヴァ副大統領から谷本一之館長に、サハ共和国A.S.ボリソフ文化大臣から椎名惟義副館長、角達之助学芸員に、同共和国との交流に尽くしたことにより感謝状が贈られました。

◆第22回特別展「環北太平洋の文化Ⅱ」の展示（展示設計：五十嵐淳建築設計）がSapporo ADC Annual 2007で銅賞を受賞しました。

不審者対応訓練講習会

12月５日［水］には網走警察署生活安全課の指導で、不審者対応訓練講習会を行いました。

北方民族博物館だより
No. 67

平成19（2007）年12月28日発行
編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
電話 0152-45-3888　fax 0152-45-3889
e-mail：tonakai@hoppohm.org
http：//hoppohm.org
指定管理者
　財団法人北方文化振興協会